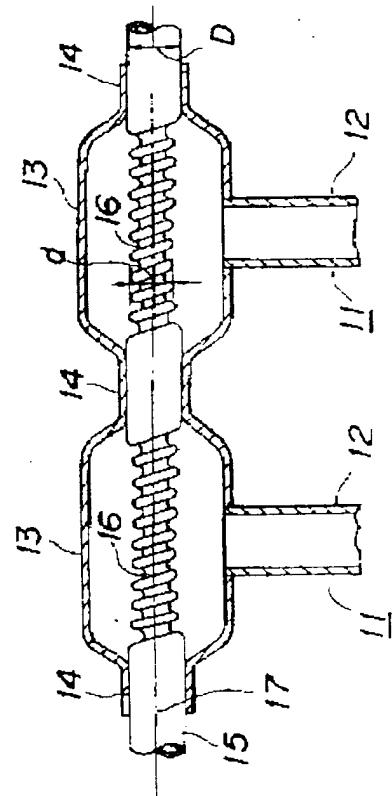


** Result [Utility-model] ** Format(P801) 30.Jan.2001 1/ 1
Application no/date: 1980-158201[1980/11/05]
Date of request for examination: []
Public disclosure no/date: 1982- 81359[1982/05/19]
Examined publication no/date (old law): []
Registration no/date: []
Examined publication date (present law): []
PCT application no:
PCT publication no/date:
Applicant: TOSHIBA CORP
Inventor: SHIMURA MASATOSHI
IPC: F24J 3/02 =F28D 15/00
Expanded classification: 242,351
Fixed keyword: R058
Title of invention: Solar heat collection of heat equipment of a heat pipe type

Abstract:

SUMMARY:Assembly can be facilitated by inserting a circulation pipe in the condensation part of the heat pipe body, and a heated fluid in the circulation pipe can be certainly prevented from leaking.
(Automatic Translation)



Other Translation



実用新案登録願(9) 繰記号なし
(4,000円)

昭和年月日 5月5日

特許庁長官 島田春樹 殿

1. 考案の名称

ヒートパイプ式太陽熱集熱装置

2. 考案者

静岡県富士市修原336番地
東京芝浦電気株式会社富士工場内
志村政利

3. 実用新案登録出願人

住所 神奈川県川崎市幸区堀川町72番地

名称 (307) 東京芝浦電気株式会社

代表者 佐波正一

4. 代理人

住所 東京都港区虎ノ門1丁目26番5号 第17森ビル

〒105 電話 03(502)3181(大代表)

氏名 (5847) 弁理士 鈴江武彦

(ほか2名)

81359

55 158201

方登



特許
実用
新案
登録
出願人

5. 添付書類の目録

(1) 委任状	1通
(2) 明細書	1通
(3) 図面	1通
(4) 願書副本	1通

6. 前記以外の考案者、実用新案登録出願人、代理人

代理人

住所 東京都港区虎ノ門1丁目26番5号 第17森ビル

氏名 (8461) 弁理士 村松貞男

甲子年
6月1日
登録

住所 同所

氏名 (6881) 弁理士 塚井

乙巳年
6月1日
登録

81359

明　　細　　書

1. 考案の名称

ヒートパイプ式太陽熱集熱装置

2. 実用新案登録請求の範囲

ヒートパイプ本体の蒸発部に太陽熱を集熱する集熱部を設けるとともに、上記ヒートパイプ本体の発熱部内に被加熱流体を流通する流通管を挿入したヒートパイプ式太陽熱集熱装置において、上記ヒートパイプ本体の発熱部内に位置する上記流通管に管径を変化させた形状の熱交換部を設けたことを特徴とするヒートパイプ式太陽熱集熱装置。

3. 考案の詳細な説明

この考案は太陽熱によりヒートパイプ本体内的熱媒を蒸発させ、蒸発させた熱媒が凝縮する際に流通管内の被加熱流体を加熱するヒートパイプ式太陽熱集熱装置に関する。

一般に、太陽熱集熱装置は例えば屋根等の上に集熱器を配設し、流通管を通じて水や空気等の流体を前記集熱器に供給し、前記集熱器

器により太陽熱を吸収して、供給された被加熱流体を加熱し、加熱された流体を流通管を通じて貯湯タンク等の外部機器に送出するような構成になっている。

ところで、正規、前記集熱容器内に第1圖に示すようなヒートパイプ1を多段配置し、外部機器に連通されている前記流通管2内の被加熱流体を前記ヒートパイプ1により加熱するようにしたものが開発されている。前記ヒートパイプ1は集熱板3、この集熱板3に接着されたヒートパイプ本体4およびヒートパイプ本体4内に収納された熱媒により形成されている。前記ヒートパイプ本体4はさらに蒸発部5と凝縮部6とから成りされており、前記流通管2内に前記凝縮部6が挿入される構成になっている。そして、集熱板3により太陽熱を吸収し、この太陽熱により前記蒸発部5で熱媒を蒸発させ、蒸発した熱媒を蒸発部5から凝縮部6に送出し、この凝縮部6で熱媒と前記流通管2内の被加熱流体との熱交換により熱媒を液化するとともに、

前記流通管2内の被加熱流体を加熱するようにしていった。しかしながら、上記従来構成のものにあつては流通管2の内部に前記ヒートパイプ本体4…の各収縮部6…が接着されていたので、流通管2に各ヒートパイプ本体4…を押着するための透孔を設けるとともに、流通管2と各ヒートパイプ本体4…との接合部を水密な状態に保持するための加工を行なわなければならず、流通管2の構成が複雑化するとともに、組立が面倒なものとなる問題があつた。また、流通管2にはヒートパイプ本体4…との接合部が多數設けられるので、これらの接合部からの被加熱流体の漏洩が生じ易い問題もあつた。

一方、ヒートパイプ本体4の収縮部6を筒状に形成し、各収縮部6…内に流通管2を押通する構成により、流通管2の構成を簡略化するとともに、流通管2にヒートパイプ本体4を接合する接合部をなくして前記流通管2からの被加熱流体の漏洩を確実に防止するようにしたものが考えられるが、この場合には流通

管2と吸熱部6内の熱媒との接触面積が比較的小さいので、流通管2内を逆流する吸熱熱流体と前記熱媒との熱交換が効率よく行なえない問題がある。さらに、流通管2は比較的なめらかな管体なので、吸熱部6内で液化した熱媒が表面張力により流通管2の表面に付着し、吸熱液膜を形成するため、熱伝速率が低下する問題もあり、そのため、装置全体が大型化する問題もあつた。

この考案は上記事情を考慮してなされたもので、その目的は、組立が容易で、流通管内の流体が漏洩するおそれも少なく、さらにヒートパイプ内の熱媒と流通管内の流体との間の熱交換効率の向上を図ることができるとともに全体の小型化を図ることのできるヒートパイプ式太陽熱集熱装置を提供することにある。

以下、この考案の一実施例を第2図および第3図を参照して説明する。第2図において、11…はそれぞれ独立したヒートパイプ本体である。これらのヒートパイプ本体11…は図示

しない蒸熱密閉内に配管されており、蒸発器
12と吸熱器13とから構成され内部には熱媒
が収容されている。前記蒸発器12には第1図
に示す蒸熱板3等の蒸熱部が設けられている。
また、前記各ヒートパイプ本体11…の吸熱部
13…はそれぞれ筒状に構成されており、接続
する各吸熱器13、13間は各吸熱部13…よ
りも小径な筒状の連通管14…により連結され
た状態で一体的に成形されている。そして、前
記各蒸発器12…は各吸熱器13…の周面にそ
れぞれ略垂直に連結されている。

一方、各ヒートパイプ本体11…の各吸熱部
13…内には連通管15が挿通されている。こ
の連通管15は前記連接部14…の内周面に密
着させた状態で接着されており、前記吸熱部
13…の内部に露出される熱交換器16は連通
管15の中心部17に対して管径が変化する形
状になつてゐる。すなわち、前記連通管15の
熱交換器16にはねじ状の凹凸部が形成されて
いる。

そこで、上記構成のものであつては、ヒートパイプ本体11…の熱端部13…内に連通管15が挿入されているので、組立が容易であり、さらに連通管15にヒートパイプ本体11…を嵌合する嵌合部がないので、連通管15内の被加熱流体の漏洩を確実に防止できる。また、連通管15内を流れる被加熱流体は前記熱交換部16を走る際、この熱交換部16のねじ状の凹凸部により乱流となり易く、そのためヒートパイプ本体11内の熱媒との熱交換効率を向上させることができる。さらに、前記連通管15の熱交換部16にねじ状の凹凸部を形成することにより、従来のようななめらかな管体よりも熱端部13…内の熱媒との接触面積を大きくすることができるので、この点でも一層の熱伝導率の向上を図ることができ。また、前記連通管15の熱交換部16は前記凹凸部が形成されたことによりヒートパイプ本体11内の熱媒が熱端部13内で凝縮したとき、液化した熱媒は熱交換部16に付着しにくくすることができるの

で、熱交換器16の側面に形成される接觸部を比較的導くことができる。そのため、ヒートパイプ本体11内の熱導と流通管15内の熱加熱媒体との熱交換効率をさらに向上させることができる。したがつて、本装置の熱効率を向上させることができるので、装置主体の小型化を図ることができる。なお、前記流通管15外における、前記各ヒートパイプ本体11…の接觸部13…間に連結する連結部14…の内側面に形成される部位以外追寸径Dを前記熱交換器16の最大外径寸法Dより大きく形成しておることにより、前記各ヒートパイプ本体11…の各接觸部13…に対し前記流通管15を取付け易くすることができ、一層の組立の容易化を図ることができる。

なお、この考案は上記実施例に限定されるものではない。例えば、前記に示すように流通管21は全体に亘つてねじ状の凹凸部を形成し、この流通管21とヒートパイプ本体11…の接觸部13…間に連結する連結部14…の内側面

第3回
第3回
第3回

との間に図示しないシール部材を介して各ヒートパイプ本体11間をそれぞれ独立させた状態で保持する構成にしてもよい。また、前記前記流道の熱交換部の形状はねじ状の凹凸部に規定されるものではなく、例えば互いに独立したフランジ状の凹凸部を多數並設するようにしたものがつてもよい。

以上説明したように、この構成によればヒートパイプ本体の吸熱部内に流道管を挿入することにより、独立を容易にすることができるとともに前記流道内に被加熱流体の漏洩を確実に防止することができるうえ、前記吸熱部内に挿入された前記流道管の管径を変化させた形状の熱交換部を設けたので、前記熱交換部の表面積を比較的大きくすることができるとともに前記熱交換部内を流れる被加熱流体を乱流にし易く、さらに吸熱部内の熱媒が凝縮したとき液化した熱媒が熱交換部の表面に付着しにくくすることができ、そのため前記吸熱部内の熱媒と前記流道管内の被加熱流体との間の熱交換効

事の向上を図ることができ、そして全体の小形化を図ることのできるヒートパイプ式太陽熱収熱装置を構成することができる。

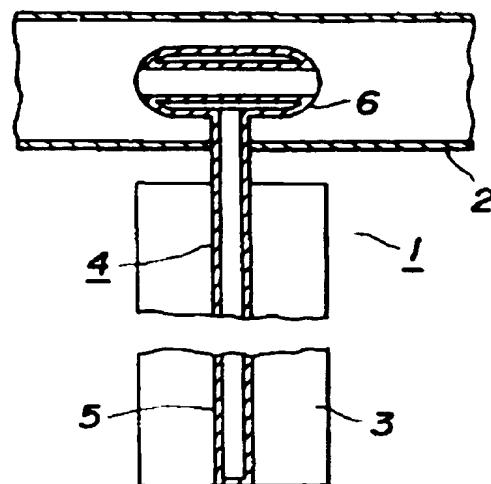
4. 図面の簡単な説明

第1図は従来例の概略構成を示す断面図、第2図はこの考案の一実施例を示す斜視図、第3図は同実施例の概略構成を示す前面図、第4図は別の実施例を示す断面図である。

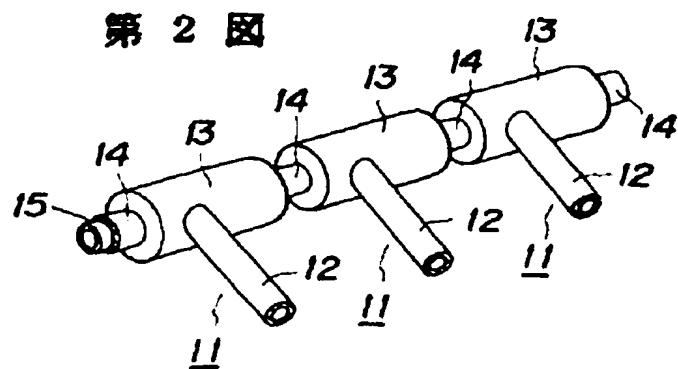
3…吸熱板(吸熱部)、11…ヒートパイプ本体、12…発光部、13…放熱部、15、21…流通管、16…熱交換部。

出願人代理人 井塙士 錦 江 武 修

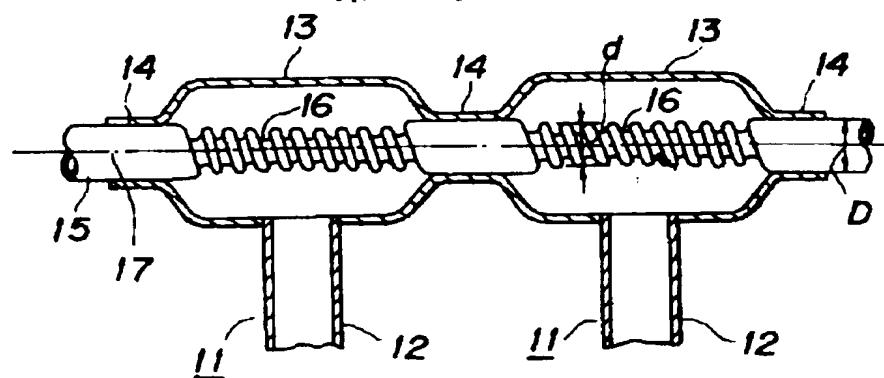
第 1 図



第 2 図

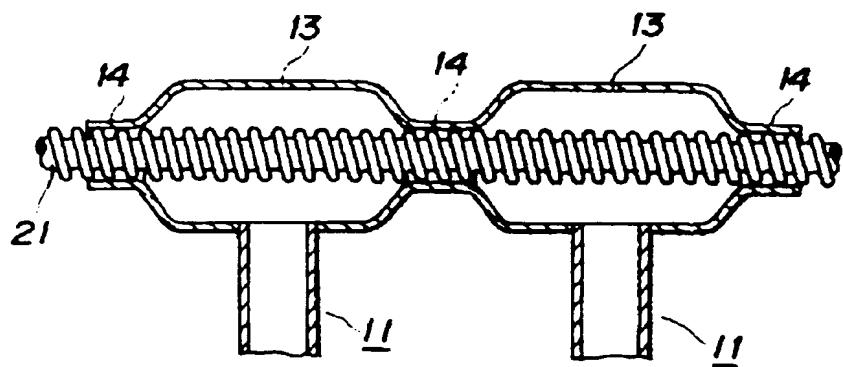


第 3 図



出願人 東京芝浦電気株式会社
代理人 鈴江武彦

第 4 図



8735.2

出願人 東京芝浦電気株式会社
代理人 鈴江武彦